

	記	述	目	録	
		落	穂	拾	い

国立国会図書館のように、わが国で刊行された図書の大半を整理しているところでは、いろいろな目録法の事例コレクションが、勞せずして可能となる。

目録法もコンピュータ入力に伴っておのずから変質し、個々の記入要素のタグづけというか、データ要素の確認とその正確な指示が一番重要になってきた。これは、データ要素をバラバラにコンピュータシステム中にストアし、必要に応じて取り出し、適宜加工して多面的に利用しようという目的に伴う変質であり、今や機械化の場面では目録規則は入力規則になりつつあるともいえるかも知れない。

「植木 農耕と園芸編」と書くと、一見植木という全集がいくつかの編にわかれているうちの一つのように受け取られるかも知れないが、この本の奥付を見ると「編者 農耕と園芸」となっていて、著者表示なのである。一方、角川文庫の寺山修司「さかさま文学史 黒髪篇」のさかさま文学史は標題紙の上部に小さくチョコンと書いてあって、奥付では「さかさま文学史」がなく、黒髪篇としか記載がない。「〇〇編」は、タグづけの際いくつかの可能性があり、担当者がいつも悩まされているもののひとつである。

出版者側も継続ものの表示を統一してほ

しいという例もある。「^{加賀}前田家御納戸御道具目録帳」という本には、^{古美術}茶道藏帳集成 下巻と表示があるが、上巻のカードは、「茶道古美術藏帳集成 上巻」となっていたのである。もっと極端な例は、「食習慣と難病の解決法 第6号」とあって、上に日本綜合医学会、下に日本綜合医学会編集委員会とある。この場合の第6号とは「日本綜合医学会雑誌」の第6号のことだったが、現物のどこにもこの誌名の表示はなく、発行者に問い合わせてやっと真相が判明した次第である。

刊行者側の出版意図が途中から変更されることも悩みのたねで、「あすの内科展望」といった年刊ものが、専門分化して「血液疾患最近の進歩」というように細分されてくる例、全集ものの改訂版、最近はやっている復刻版などの処理に高等技術を要する事例が多い。

この手のものには、目録作成の時点で担当者がいかに目を光らせても発見不可能なものが多い。

ドイツの目録規則に‘Autopsie’という言葉がでていいる。「実地検証」「検屍」という意味で、Postmortem「死後」（固定化、硬直化した）出版物を、あるがままに忠実に記述するという場面に用いられている。まだ生きていて、今後どのように変化するかわからない出版物を、ある時点でとらえて目録する場合には、例であげたような困難、不可抗力要素が常に存在する。

森が動き出すように、一見固定していると見える単行本でさえも「続」、^{続々}となるから油断は禁物である。

（収集整理部主任司書 丸山昭二郎）